

# 矢板希望の星

酪農経営は、経営規模の選択が難しい。大規模に行うか、家族的な経営を維持するか選択が迫られる。また、TPPなどの難しい問題もある。親から受け継いだ酪農経営に若い感性を生かし、さまざまな工夫をしながらそれらの難しい課題を乗り越えていく。

塩田の和氣輝さんも、そんな酪農後継者の一人だが、現在、放射能汚染物質の最終処分場問題で経営の危機に立たされている。



和氣輝（あきら）さん  
（35歳）

## 安全安心な牛乳、牛肉を消費者に！

一年間、海外でアルバイトをしながら、高校卒業後、一年間アメリカで酪農の経験を積んで、今年度から矢板に帰って家業に就く。

が強いのではないだろうか。実際、生き物相手の仕事だけに時間の制約は多い。しかしそれは考え方はないか？自分がどんな感覚で生活していくかで『時間に縛られる』という観念はなくなるのでは？」と和氣さんは言う。

### 好きな道に進んで良いと言われたが

酪農は輝さんの父親が始めた。輝さんが中学生の時には、乳牛に加え肉牛（和牛）も飼育するようになった。

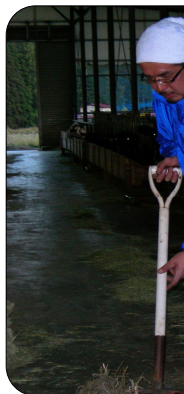
当初は長男である兄が家業を継ぐものと思っていたが、その兄が剣道をやっているヘルニアになり、足をひきずるようになってしまい、「家業は継げない」と親に言っているのを聞いて自分が継ぐしかないと思ったのは、輝さん

福島原発事故による放射能汚染の問題という、今回の降って湧いたような放射性廃棄物処理場の話といい、心配事は多いが、両親と力を合わせ、安心な商

### ■安心な商品を消費者に

「酪農家と言うと『休みがないから大変』という一般的なイメージ

が高校生のこと。両親は「仕事も大変だし、自分たちの頃は頑張ればそれだけの成果があり、時代的に良い環境だった。設備投資や、将来の先



餌早く〜！

その頃はそんなに景気も悪くなかったこともあって、高校卒業後、家業を継ぐことを決心した。

### ■経済動物だがペットを飼っている感覚

「和牛は特に弱いので、子牛が元気に育ってくれるのが一番嬉しい」と、笑顔で話す輝さん。

### ■絶対安全安心な商品を出荷

これからの夢はチーズ作り。それと乳牛を減らし、和牛の比率を増やし休耕地を利用して自給の飼料（今は輸入の餌）をつかい自然で健康な牛乳を届けたらいいと思っている。

当牧場では、原発に關しては土の除染も終わっており、餌は遺伝子組み換えのない飼料を使用している。

現在、和牛は県の厳しい管理のもと出荷。牛乳は国の基準値を超えないように成分が入っているだけで、メーカーからはアウトにされる。

それだけ厳しい品質管理なので販売しているものは安心して購入したり、飲んで欲しいと話す。

### ■若者の雇用にも影を落とす処分場問題

子育て環境も大事なことだが、まず若者の働く場所、雇用

問題が先決ではないかと輝さんは思っている。「若者が定着しなければおのずと人口は増えない。しかしこれも処分場問題が絡んでくるだろう。家など建てる人、矢板に来ようと思う人などがいなくなるのでは？矢板市を離れていた家族が年老いた親を心配して戻ってくる。そんなパターンもなくならないかもかもしれない」と心配している。

この問題が発生したことで、この先酪農が続けられるかも分からないので、今は設備投資を考えることができないという。

餌となる草が汚染されていなくても風評被害が怖い。自分の夢をかなえるには、処分場の白紙撤回が最低条件だという。

そんな不安を抱えながら、輝さんは今、夢を持って家業に専念できる日がくることを願って、今自分に出来ることを精いっぱい頑張る」と心に決めていく。

(R・K)